

# くもい<sup>のち</sup> 晴れ

～自閉症・発達障害の人たちの  
幸せを願って～

NPO 法人東京都自閉症協会理事長 **今井 忠**

『親御さんや当事者の想いが  
伝わってくる。  
確かなメッセージがここに  
ある。専門家も必読の書!』



—信州大学医学部附属病院子どものこころ診療部  
部長・診療教授 **本田 秀夫氏** 推薦

先日、ある講演会で最後に私は、「自閉症の人は自閉症のままで幸せになってほしい。そのためには生活の中に自分なりの楽しさがあることが大事」と強調した。後に続いた当事者であるK氏も、前もって打ち合わせをしていたわけではなかったのだが、やはり同じようなことを、体験をもとに話してくれた。当事者による話がとても刺激的だったようだ。多くのアンケートにそう書かれていた。

私も他の多くの方と同様、最初にこの障害（症候群）のことを学んだときは、社会性、コミュニケーション、想像力・こだわりなどのいわゆる「三つ組の障害」をどう克服したらよいかに意識が集中した。しかし、あるとき、自閉症など障害のある人たちの絵や造形の展示会場にたまたま入り、驚いた。上手かどうかではない。見せようとして描かれたものではない。明らかに別の感覚世界に没頭している。

自閉症であれ、アスペルガーであれ、今の社会で生きていくことは楽ではない。勉強ができて、資格が取れても、生きづらさは続く。彼らに接してい

て思うのは、感覚の違いがもたらす日々の不全感である。子どもの障害を知った親は、障害を軽減したいと思って頑張る。支援者も同様である。しかし、それが本人を改造する方向に向かうと、ますます不全感を強めてしまう。

芸術や音楽だけでなく、研究でも旅でもよい。没頭できる健全な感覚世界を持っていることが、何よりも生きる力になるのではないだろうか。そのためには、親みずからが生活を楽しむことなのだろう。なぜなら、子は親をまねるから。

【196号 2011年11月8日発行】

